

# 山 伏 と 狐



のほりがまで焼いてでき上がり。  
わしんたあが手伝ったとつくりは、だれが使いなれるかなあ。雪国で正月をこすのかなあ。寒  
さにおいて割れんようになあ、と思いながら馬車で駅へ運ばれるとつくりを見送ったもんよ。

近藤一子

## 山伏と狐

菜の花の黄も、げんげ田の紅も、その上にたわむれる白い蝶も、みつ蜂のうなり声までが、飴湯のなかへとけこんだような、春のまつ昼間です。かなたの観音様の大屋根も、火の見やぐらも、かげろうといっしょにゆらいで、いつもよりいっそう遠く見えます。

長い一本道を、向うの方から人がひとり歩いてきます。近づくと旅の衣にわらじばき、頭には頭巾をいただき、背中においをせおい、右手に長い杖、左手にはほらがい、腰には大刀をつつた山伏だとわかりました。わたくしがこんなふうの説明しただけでは、山伏とはいったいなにか、さっぱりけんとうのつかない人があるのかもしれないこと、これからするお話は、むかしのむかしのことなのですから。山伏はこうした姿で、お寺やお宮をおまいりしながら、日本中をめくり歩いたものです。

山伏はふと足をとめ、道ぐろの麦畑の方へ目をやります。いまにも穂が出そろういそうなおおおとのびた麦の葉かげに、一びきの狐を見つけたからです。三角にとがった耳を伏せ、太いしっぽをまるめ、狐は大きないびきをかいて、気もちよさそうに昼ねの最中です。いくらお日さまがとろけ出そうな春だとはいえ、こんなかつこうを人間に見つけられるとは、あんまりのんきすぎるのじやありませんか。

山伏の日やけた顔に、いたずらそうな笑いが浮かびました。手にしたほらごいを、そおっと狐の耳もとへあて、胸いっばいすいこんだ空気で、吹き鳴らしたのだからたまりません。狐は鉄砲でうたれたかのように一メートル近くもとびあがり、あわてふためいて逃げ去ってしまいました。

そのあとを追っかけるように、山伏の高笑いがひびきました。今朝から歩きずめでたいくつきついていたのをたんのうしたらしく、すっかり気分をなおして歩きはじめました。ところがほんの十歩も行かないうちに、たちどまってきよろきよろあたりを見まわします。まわりのようすがへんなのに気がついたからです。いままであんなに明るかったお日さまの光が、急にかげつてきたようです。きんぼうげも、たんぼぼも、桃の花も、すうつとくろろずんでいきます。蛙のおしゃべりも、ひばりの歌声も、もう聞こえてはいません。すっかり度を失った山伏にはおかまいなく、空のすみずみまですっかり暮れつくしてしまいました。

そんな時、うろたえきつた山伏の耳が、ふと風の音をとらえました。すぐ近くにひとかかえもある松の大木がそびえ立っていました。あおぎみると、夜空にいく重にもかさなつてくろろろとひろがる枝を、風がごうごうと鳴らしています。この枝の下なら夜つゆにぬれることもふせげう、ともかくここでひと休みとかくごをきめ、山伏は松の根もとによりかかって腰をおろしました。

遠うく、遠うく、かすかにもの音がおこります。その音はしだいに大きくなり、はっきりとしてき、松の夜風の音のなかへ、だんだん近づいてきます。大ぜいで念仏をとどめる声だとわかります。こんな夜ふけの、こんなさみしい所へ、いったいなにものがやってくるのでしょうか。山伏の体じゆうにぞおつと冷たいものが走りまわりました。もう前後を考えるひまもなく、松の木によじのぼりました。

提灯がひとつ、やみのなかにはぼつんと浮かびます。その提灯の火を先頭に、念仏の行列はたちまち近くなり、こわごわ見おろしている山伏のちょうど目の真下まで来てびたりと止まりました。念仏の声も同時にやみます。男も女もすべて白衣、女たちはときほぐしたかみの毛を、長く後へたらしめています。数ははっきりわかりませんが、十人はいるようです。まんなかあたりにかんおけらしいものもかっついていきます。行列が止まるとそのうちの三、四人が、くわをふるって松の根もとに穴を掘りはじめました。提灯のうす明かりのなかで、ただくわの音が、かっかっとおこるばかり、人の声ひとつ聞こえません。みるみる穴が掘りあげられ、かっついてきたかんおけをなかへ埋めると、その上にまるい土まんじゆうがきずかれまわりました。それだけのことをすますと、行列は今度は無言のままいま来た道を引きかえして行き、あつというまに提灯もまっくらやみにのみこまれてしまいました。

どのくらいの時がたつたのでしょうか。松の木の根もとのあたりが、ばんやりとうす明るくなってくるようです。目をこすって見さだめると、たしかさきほどかんおけが埋められたばかりの場所にちがいません。いつのまにか土まんじゆうが、冷たい光のなかに浮かびあがっています。そしてその中心から、いくすじものひびわれが四方へ走りまわりました。

山伏はもう生きた気もちもありません。それでも両方の眼だけは、土まんじゆうの上にすいつけられてはなれないのです。とうとう恐ろしいゆめを見ているようなことが、すぐ眼の下でおこります。ひびわれから青い鬼火が、蛇の舌のようににもえあがります。つづいてするどく爪のびた細い指先が、あおじろくやせこけた二本の手が、うらみをのんで葬られた死人の顔が現れました。

そればかりか、霧の中からはい出した死人は、山伏のかくれている松の木をのぼりはじめました。もはや枝をつたって上へ上へと逃げるほかみちはないのです。一だん、二だん、死人はゆっくりはしているが、かくじつなはやさで追いつまてきます。三だん、四だん、なまぐさく荒い息づかいが、すぐま下に聞こえてきます。五だん、六だん、もうこの上の枝はありません。米つぶみたいな星をちりばめた夜空があるばかりです。山伏のくちびるから、せつない悲鳴がもれ出しました。死人の右手がかま首のようにのび、山伏のすねにへばりつききました。

なんともいえぬ冷たさにわれにかえった山伏は、道ばたからころげ落ち、麦畑のうねの間に眠